



けしんすまの園りハ記張乃らまをり  
予小部りの友りやを友や張り終果終と  
得し竟果る不居すや里張乃らまをり  
款りを多之に記し不ゆさひに多は杖を  
曳くや何系し記を而も其に終の日記記  
まると仇持りおぬしお記を其の終を  
とつてハ月り請ふも其を携へて其  
おまの居し記をてあれは世に丸丸の

鞠を膝に書か東都乃孫何某日  
多らうと是をばけしをいひしは  
筆をたしむるをたしむるを思ふ  
唯るは化せしは流り乃麻を  
然るは月の後作も乃は林の  
此の如くはしつれはやま飛  
せらふと流るるの流とあはる  
了らぬと月乃えしめ舟のなをふ  
おと流るる例の朱道乃流りけ

一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
世の別を言ひしは言ひ入る  
自派居士との一飛とひくはあふ  
松香の液と一色りなははる  
此の如くは言ひしは言ひ入る  
其の如くは言ひしは言ひ入る

漸く言ふも悲しきぬけの増えても いかにあ 又東

筆の跡世もいかに  
好む人よあきらむ

惜玉——一葉多から次香の紅

電駁

此の日のまはるか舎より  
首のし風交すも

とうねる世は小舟のむら風

棠徑

ありてはまはるはぬるまはるまはる

女  
若菜

心のかげ

好む人よ字も涙も汗ぬく

紀言

好む又よまらふ志もぬ

紀井

見ぬくちりひれり男を

晋我

まはる——女を海の花も

盛徳

あらはるや翠のたふさく

雲我

水先よ何く〜ん言燈籠 雲井

うつせ川哉や蓬乃もむ〜ん 赤好

すなはて〜の淋しむ秋哉言燈籠 和舟

かきすまの三姉〜滑りち夏の月 無外

橋ふ少〜るぬ一葉や法乃紅 石龍

三

月井又〜ぬ月の暮るる塚の暮 一孤

すあ〜れ〜の〜る如や蓬乃花 為候

秋夜も〜無〜い〜る〜ん蓬の池 紫守

東〜秋夜も〜い〜る〜一葉の浮〜れ 由之

望〜海おち〜る〜る川舟や法乃紅 半浪

ち〜る〜る秋〜の〜る〜る乃手向〜り 美穂

何の如く——早宗の其の如く  
感宣

世帯の如く——  
其雄

跡の如く——  
能登

影の如く——  
琴翁

能の如く——  
系相

と如く——  
物雪

朝の如く——  
素梅

笑の如く——  
貞梅

我の如く——  
親お又

弓の如く——  
慕豊

とての末の末とてしる

何事か〜く〜直

いつか〜の世の中

た〜の〜安啟

あ〜の〜

と〜の〜智啟

又

葉の〜の化 菅卷

彼國へ〜の〜 玉轡

卯の〜の〜 田舎

卒哭忌

一編の〜の〜 菅卷

一編の〜の〜 綿吾

とあややはるしはるものとき時由 佛を

書物すも鏡又も如厚氷 徳昌

かきよはと物志るるも女しと道 葉守

るも女千夜ふ思り何れか那 純堂

情めともも物し物あふも風のあ 青羅

鞠と水淋し也垣のしよ水柳 右井

六

物としし物ふもふしん水心是 系相

ふも屋ふりしりし物いそあふもり 文海

中あふふも月也水柳のたふり 花西

はあふもあふも千るも道し物水 文東



津新月のこぼれ境の  
糸織子よまかりりり  
はくみりり

・家神をまじりて祈る事なり

蓼太

居士、ふんえのかきりて、  
一棒をくき世の網を破投す者なり  
文後、ふぬ、永義、ふんえ、  
張起、ふん、一、  
か、の、  
ふ、小、  
ま、

文束

羊浪画



居士

一棒の蒲風はとあやう陸の風

志こゆ海も水無月乃影 文海

酒醒守五位の上階衣統うす 文東

管の巻たてのりそとあふも 花母

あふあふ曉きやれ藤のうす 琴若

あふあふをる糸垣のうす 花川

くら印の信を以て命履踏

川

神を以てすしに仕付る

松翁

都名の妙如きもの

松雪

卯乃花の次をみわす

素梅

物喜戸乃物ぬらな

海

かた月之と以て胡弓物

束

九

森之山月之鏡も

好

有馬平駒も

高

いっしよの世に流転る

川

かたしは好乃老多

結

日よすかすいとむ

花

帳より海より廊の玉

空

尾中曳く急守の猫乃泥中を運

梅

ま〜りひも見ぬ様のを〜り

海

〜りおのりや〜り比とぬ〜り病

東

〜り一日比敵のぬ版を尾

好

小昔りもさしと様乃一全ゆり

高

怪記持豆の首途又を守

川

十

記ふ〜乃全訓〜記巻の奇死

縁

昔んも初後〜た掛子お松板

花

〜り印と全及の狸心〜り後髪

雪

本乃習ゆ〜るまゆの葉梅堂

梅

い〜り海月〜り昔〜り〜り新町

海

踊〜り果乃〜り〜り〜り〜り

東

清く静かに流るる川に  
しきりに流るる川の  
牛の群を眺むる作田の里  
くまの里に流るる川の  
又くまの里に流るる川の  
くまの里に流るる川の

好 象 川 結 石 壑

あゝ六 あゝ 結石

